

08

August
2025

[月刊]キリスト教書評誌

本の

HON-NO-HIROBA

ひろば

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2025年8月1日発行(毎月一回1日発行)第812号

出会い・本・人

「力から力へと進み」続けるために 永井信義

特集シリーズこの三冊!

コンクラエヴェ(教皇選挙)について知るならこの三冊!

——キリストの一番弟子ペトロの後継者選びと教皇制度

阿部仲麻呂

本・批評と紹介

高橋洋成著 「イエスの言語」をめぐる論争史 小河 陽

兼子盾夫著 遠藤周作の生涯と文学 奥野政元

島田 恒著 生涯現役が贈る人生の道標^{みちしるべ} 上林順一郎

本多峰子著 イエスとの出会いと救い 相賀 昇

森本佳代、森本二太郎著 ルピナス・ヴァレーへの道 伊藤瑞男

山本賢蔵著 静寂者ジャンヌ 西平 直

リタ・ナカシマ・ブロック、レベッカ・アン・パーカー著／福嶋裕子、堀真理子訳

灰の箴言 藤本 満

住谷 眞著 神さまのエンドロール 佐々木潤

◆ 既刊案内

◆ 書店案内

キリスト教女性論の
再構築を図る精緻な原典研究！



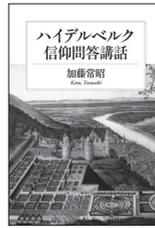
古代・中世のキリスト教世界において、女性はどうのように描かれ、どのように理解されたのか。画像や文献の間隙から多様な女性像を丹念に抽出する気鋭の論考集。

●A5判・264頁＋口絵12頁・定価4,070円

古代・中世キリスト教における女性イメージ

山田望／袴田玲／坂田奈々絵／山田順〔編〕キリスト教史学会〔監修〕

加藤常昭



宗教改革の戦いの中から生まれ、改革教会の枠を越え、世界で広く読み継がれてきた『ハイデルベルク信仰問答』。美しく力ある信仰の言葉、喜びの真理である福音の急所を突く見事な表現、改革者たちの福音理解の中核を捉えた教理的骨格は、現代の私たちの魂に深く訴えかける。日本語による最高の講解書。長く親しまれてきた名著を合本にして装いを新たに復刊！

●B6判・550頁・定価4,950円

ハイデルベルク信仰問答講話

魂の深奥に訴える福音の真理

世界の神秘としての神

有神論と無神論の論争における、十字架にかけられたお方の神学の基礎付けのために

E・ユンゲル〔著〕 佐々木勝彦〔訳〕



十字架における神の愛の神学

神を全能で不変の存在とみなす伝統的な有神論の神思想が崩壊し、「神の死」が叫ばれる時代の中で、われわれはいかにして神について思考し、神を表現することが可能になるのか。「神は愛である」という命題を三位一体の神の概念から徹底的に考察し、現代における新たな有神論的神概念を提示した名著。20世紀を代表する神学者エーバハルト・ユンゲルの名著の待望の翻訳！

●A5判・732頁・定価14,080円





「力から力へと進み」続けるために

永井信義

数多くの外国語で著された書物が出版されているが、邦訳のタイトルは商業的な理由から、実際のタイトルとは違うことがあるのはよく知られていることだが、『人生後半の戦略書』（S Bクリエイティブ）もその一つだろう。原題は「From Strength to Strength」で、本書の見開きには詩編84編6～8節が引用され、そのタイトルは8節の「彼らは力から力へと進み」から取られている。ちなみに、副題（原題）は、「人生の後半で成功、幸せ、意味深い目的を見出す」である。

今年（2025年）の5月、今回本書を取り上げた理由でもあるのだが、ロンドンで開かれた国際大会で、著者アーサー・C・ブルックス（ハーバード大学教授）の講演を聞く機会に恵まれた。第7章「林住期に入る 信仰心を深める」の中で、彼自身のキリスト教信仰について記しているが、その講演でも彼が自らの神との関係について大胆に証しする姿は強烈な印象として残っている。

同じ章で、個人的にいつかはチャレンジしたいと憧れているサンティアゴ・デ・コンポステラについても述べられているが、巡礼がもたらす効果について語る中で、神学者、小山晃佑の『助産婦は神を畏れていたの』（同心社）からの一文を引用されている。それはいまだに速さが強調され、評価される中に日々を歩む私たちが忘れてはならないものだと思う。「時速3マイル、私たちの歩行速度であり、故に神の愛の歩行速度であります」

「力から力へと進み」続けるためには、「削る」ことが必要だと本書は論じている。つまり、「死ぬまで足し算を続ける生き方をやめる」ことである。まさに「ぶどうの木」である主イエスが「実を結ぶ者はみな、もつと豊かに実を結ぶように手入れをなさる」（ヨハネによる福音書15章2節）ことが示されているのだ。

（ながい・のぶよし＝東北中央教会牧師、拡大宣教学院学院長）



▼シリーズ この三冊！

コンクラークエ(教皇選挙)について知るならこの三冊！

— キリストの一番弟子ペトロの後継者選びと教皇制度

阿部仲麻呂

(あべ・なままる…日本カトリック神学院教授、日本宣教会常任理事)

一・映画『教皇選挙』(コンクラークエ)

『教皇選挙』という映画がはやりました。2024年に英国と米国で大ヒット

し、アカデミー賞脚色部門に輝きました。

ロバート・ハリスの小説が原作です

(Robert Harris, *Conclave*, Hutchinson,

2016)。ローマを本拠地とするカトリック

教会では最高指導者の教皇が亡くなる

と後継者を決める選挙を行います。シス

ティーナ礼拝堂の扉は外側から鍵をかけ

られ (cum+clavis 鍵と共に ↓ conclave ↓

conclavo 閉じ込めること)、百名以上の枢

機卿が閉じ込められ、三分の二の票を獲

得する者が現れるまで投票を繰り返しま

す。枢機卿の通信機器は全部没収され、

外部からの情報も遮断され、誰が牧者に

適するか熟考と祈りの日々が続きます。

礼拝堂内部には16世紀にミケランジェ

ロが「最後の審判」の壁画を描きました。

それゆえ枢機卿たちは誠実で責任ある選

挙を行います。誰を後継者に推すかの判

断が最後の審判の際にキリストから裁か

れ、それを蔑ろにした投票者は地獄の責

め苦を受けることを肝に銘じさせます。

枢機卿は教皇を補佐する顧問です。教

皇庁内部に勤務する担当者と世界に散ら

ばって地域ごとの教会活動の監督をする
役目を分担して活躍します。教皇はイエ
ス・キリストの一番弟子の聖ペトロの後
継者であり、5月に選出された新教皇レ
オ14世は第267代目です。

しかし映画では架空の登場人物が投票
をめぐる話し合いを繰り返し、おたが
いに票を奪い合う熾烈な闘いが描かれま
す(実際の選挙では互いに相手の状況を
聴こうとする親身な姿勢での交流が続
きました)。あまりにも人間的な権力闘争

の駆け引きに陥る枢機卿たちの姿は滑稽
で愚かです。枢機卿になったばかりの新
入りの登場人物もおおよそ次のように述
べました。「選挙のためにここに来たが、
これで最後だ。もう二度と来ない」。戦

場の悲惨さを熟知した新枢機卿の呼びか
けを聞いた枢機卿たちはシユンとして頭
を垂れて深く反省する場面には信仰者の
誠意が垣間見えたので、安堵させられま
した。他にも心からおわびする場面が結
構盛り込まれ、枢機卿職の尊さが伝わり
ました。

コンクラーヴェについて学びたい方には以下の文献をお勧めします。①秦野るり子『パチカン——ミステリアスな「神に仕える国」』（中央公論新社、2009年）では「コンクラーベ」（129―137頁）という解説が充実しています。報道の専門家としてのリアルな観察眼による解説は読者の気持ちを駆り立てます。時事報道の動体視力による情報把握の視点をまともめているので、教皇庁の内部事情を理解するための入門書としては適しています。他に、②松本佐保『パチカン近現代史——ローマ教皇たちの「近代」との格闘』（中央公論新社、2013年）では「コンクラーベ——教皇選出」（26―30頁）というコラムが収載されています。教皇庁が諸外国とどのように交渉して近現代の歴史に影響を及ぼしているのが正確な資料研究によって過不足なく説明されているので、世界的な視野で国際情勢をつかめる利点があります。ヨーロッパの外交史における教皇庁の役割を明確に描いた研究書としては日本初の快挙であ

り高く評価できます。そして③松本佐保監修『ローマ教皇とパチカン2000年の謎』（宝島社、2025年）も役立ちます。ちょうど②の内容に則り、さらにわかりやすい図版を多用することで視覚的に教皇庁の外交史を瞬時に理解できるように工夫されているので読者にとって親切な本です。協力した編集者たちの手腕も冴えています。

二、ローマ司教の伝統を継ぐ「信頼できる親」（パーパ）としての教皇

ローマ司教は、イエスの直弟子のペトロの後継者とされ、きわだった愛と奉仕の実践において、ローマ帝国占領下の初代教会以来あらゆる人々からの尊敬を受け、それゆえに信仰上の父親としての親しみのある愛称でPapa（ラテン語）と呼ばれます。邦訳では「教皇」ですが、実は「信頼できる親」を意味します。教皇は普遍教会における最高の統治権と教導職を有し、あらゆる司教たちを束ねて一致をもたらず「しもべらのしもべ」で

あり、「神と人間とのあいだを橋渡しするキリストの代理者」としての責任を備えます。教皇職が意味する内実は「信仰上の父」、「ローマ司教」、「キリストの代理者」、「使徒のかしらであるペトロの後継者」、「全カトリック教会の最高司祭」、「ラテン教会総大司教」、「イタリア首座大司教」、「ローマ管区首座大司教」、「パチカン市国元首」です。

教皇 (Papa) という称号の一番古い使用例は第36代ローマ司教聖リベリウス（在位352―66年）の墓碑です。そして東方教会から第45代教皇大聖レオ1世（在位440―61年）に対して宛てた書簡でも使用されました。西方教会では5世紀半頃からローマ司教だけが「教皇」と呼ばれました。第157代教皇グレゴリウス7世（在位1073―85年）から公文書でも正式に使用され、当時の世界全体だった地中海周辺で了解されました。第64代教皇大聖グレゴリウス1世（在位590―604年）は「神のしもべらのしもべ」(Servus servorum Dei)と自

任しました。ローマ司教は中世ヨーロッパに「大司祭」(Pontificus Maximus)、「キリストの代理者」(Vicarius Christi)、「ローマ教会の最高司祭」(Summus Pontifex Romanus)と呼ばれました。

三 初代ローマ司教のペトロについて

使徒ペトロの存在感は新約聖書の記述において特別な位置を占めます。特にローマ・カトリック教会の神学において教会設立の根拠およびペトロの首位権の端緒として解釈されるマタイ16・16-19の箇所で、ペトロはイエス・キリストから特別な認定を受けました。以下の四点を鑑みれば明らかです。①ペトロは他の弟子たちに先じてキリストの意義を明確に告白することで祝福を得ました。②キリストはペトロによる信仰告白を神の啓示によるものとして認めました。③キリストはペトロを教会の土台として「岩」と呼びました。④キリストはペトロに対して罪のゆるしのための権能である鍵を与えました。しかも使徒言行録の

記述によれば、ペトロはエルサレム教会で頻繁に説教することで使徒としての責任を果たしつつ、異邦人の回心を支えて世界宣教への先鞭をつけた指導者でした。

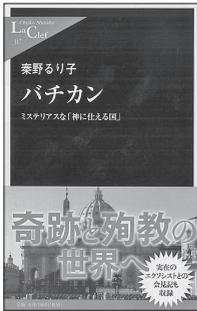
四 近代の教会が現代の教会に影響を及ぼした教皇についての教え

第二バチカン公会議(1962-65年)が現代の教会共同体の方針を示します。『教会憲章』では教皇の呼称として「ペトロの後継者」が特に重視されます(同8項、15項、22-25項)。そして『エキュメニズム教令』2項、『司教司牧教令』2項、『宣教活動教令』5-6項でも「継承」が強調されます。教会共同体はイエス・キリストを直に目撃して共同生活によって志を全面的に受け継ぐ使徒としての継承の迫力を重視します。

「教皇」の重要性が明確な教えとして確立されたのが近代の第一バチカン公会議(1869-70年)でした。そして第二バチカン公会議は第一バチカン公会議の決定事項に沿って教皇職が教会内部

で示す権威を再確認しました。『教会憲章』18項を見れば明らかです。こうして、すでに第一バチカン公会議の際に主題となったローマ教皇が保持している「首位権」を制定し、その権威が永続する性質を備えており、その権能を根拠づける教えが第二バチカン公会議においても確認されるとともに「教皇の不可謬の教導職」もまた重視すべきことがローマ・カトリック教会では明らかにされました。

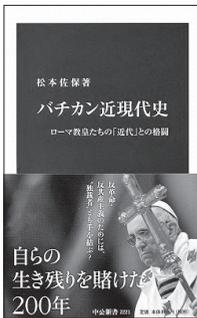
第一バチカン公会議は教義憲章『パストール・エテルヌス』(「永遠の牧者」という意味)で「教皇の首位権」を明確に認定し(1-3章)、次に「教皇の不可謬性」(4章)を確認しました。しかし教皇の「首位権」も「不可謬性」も、ともに地上の政治権力とは異なります。むしろ二つの教えは、第一バチカン公会議および第二バチカン公会議の討議を経て、信仰と交わりによる使徒団全体の一致を保つ信頼性を基礎とします。つまり教皇は単独で政治的支配を行う独裁権力者ではありません。むしろ教皇はキリスト者



『パチカン——ミステリアスな「神に仕える国」』

秦野るり子：著
中央公論新社
2009年
新書判 224頁
836円

※現在販売しておりません。図書館のご利用をお薦めします。



『パチカン近現代史——ローマ教皇たちの「近代」との格闘』

松本佐保：著
中央公論新社
2013年
新書判 288頁
946円



『ローマ教皇とパチカン——2000年の謎』

松本佐保：監修
宝島社
2025年刊
A4判 96頁
1,650円

全体の信仰と倫理道徳的な立場を適切な仕方で護り支えるために、牧者としての司教団と一致協力して使徒的な交わりによって奉仕します。その状況はイエス・キリストの意向を実現すべく努めた筆頭使徒ペトロと他の使徒たちとの一致団結の姿にもとづきます。

五 結語——キリストによるいのちが

けの愛の姿を受け継ぐために
コンクラーヴェ（教皇選挙）は、キリ

スト者による愛の実践を具体的にあかしするローマの牧者たちの連携を歴史的に絶やさなためための教会組織上の工夫として中世期に制度化されました。相手を支えて自分のいのちを捧げるキリストの十字架上の姿こそが、キリスト者にとっての愛の極致なのですが、その姿に見習って聖ペトロも十字架にはりつけにされて殉教しました。しかも頭が下にくるようにして足を天に向けて「逆さはりつけ」という、一層苦しみの増す仕方で。枢機

卿たちは赤い色の服を着て殉教する覚悟で信仰を深めて信徒たちを護りますが、教皇に選出されることで「小羊の血で洗い清めて白くなる」（黙示録7・14）という聖なる歩みを実感するべく一層成熟します。いのちがけでキリストの愛の姿を世界に向けて示しつづける責任者を真剣に選ぶしきたりの真意が大切に理解されるように願ってやみません。

「イエス時代のユダヤ人の言語」を論じる、
研究者たちの多種多様な言語観

〈評者〉 小河 陽



「イエスの言語」を
めぐる論争史
古代から近代まで
高橋洋成著



「イエスの言語」を巡る議論は、一九世紀末に至って G・ダルマンの包括的な論点整理と方法論を経て、R・ブースの言う「唯一アラム語説」としてほぼ結実した。しかし、イエス自身の言語の問いや関心は古代には見られず、ルネサンス後人文主義の時代に入ってからのもので、それ以前はより広範に、パレスティナにおけるユダヤ人の言語を巡る議論であった。このテーマを巡る実に多種多様な所説が、入念に、そして手際よく時系列に纏められた本書の出版は、重要な問題のわりに類書が余り見当たらないだけに、大いに歓迎したい。

本書は同志社大学神学研究科に提出された博士論文に加筆修正がなされたもので、膨大な文献の中から重要性を鑑みて選択された議論が論争史として簡潔に辿られており、その論述は賞賛に値する。

著者はイエスの言語を巡る議論の「噛み合わなさ」に着目し、それは「言語の呼称」でもって意味されているものについて研究者の間に見られるずれに由来するのだと喝破し、各時代の研究者らの言語観を詳述してゆく。

本論は二部構成からなり、第一部において「ヘブライ語」「アラム語」「シリア語」の呼称の発祥とその背景が調査・研究されている。そして第二部においては「ユダヤ人の言語」について、時代と研究者の間の言語観の違いが丹念に記述されてゆく。

その豊富な内容を簡潔に紹介することは到底できず、関心ある読者が是非自ら味わって欲しいと思う。実に多様な言語観が見事なまでに歴史的に描き出され、著者が着眼した研究者間の言語観のずれは綿密な調査を通して十分説得的に論証されている。ただ、惜しむらくはそこに重点が置

かれて、各々の言語観がどのような資料と証拠に基づいて形成されたものであるかまでは殆ど論じられていないこと、そして探求が一九世紀末で終わっていることである。それゆえその適確性についての判断基準はそこから示唆されず、また二〇世紀に入って重要資料の爆発的発見、特に死海文書の発見によって、一九世紀末に確立されたかに見えた定説の修正が現在には余儀無くされている事態が反映されない結果になっている。その観点からは、「ヘブライ」の語源や、ヘブライ語旧約聖書や七〇人訳に見られる言語呼称を検討する第一部は評価できるが、第二部は少々物足りず隔靴搔痒の感がする。

著者はそれを今後の研究対象と心得ていて、本書はその全体構想の途中という理由にあるようなので、続刊に期待

したいところである。この点の興味は、さしあたり土岐健治／村岡崇光『イエスは何語を話したか?』（教文館、二〇一六年）（ただし、土岐氏の論述は実質J・A・フイッツマイヤーの論考を焼き直したもの）やD・ビヴィン／R・ブリザード（河合一充訳）『イエスはヘブライ語を話したか』（ミルトス、一九九九年）で補うことができる。最後に今ひとつの注文。翻訳引用には脚注に原文が添えられているが、残念ながら未だ稀には誤植の他にその訳に間違いもある（例えば、一九〇頁注三〇一、一九九頁注三三二）。

（おがわ・あきら 前関東学院学院長、立教大学名誉教授

（A5判・三三〇頁・定価七〇四〇円・教文館）

ヨベルの新刊 / 重版案内

小林重昭 [著]

三要件

小林重昭

三要件 講解
十戒の祈り使徒信案

十戒・主の祈り・使徒信案

講解

推薦文
錦織寛牧師

これほど真正面から、ここまで愚直に「三要件」に挑んだ牧師がいたのだろうか？

キリスト教信仰の3つの柱とも言うべき「三要件」を、日々の暮らしの中に優しく語り込んでいく神の愛の多彩な使徒信と語り込めんと欲す――81歳の生涯を終えた牧師が遺した珠玉の説教集。A5判上製・五〇〇頁・三〇八〇円

ガリラヤに生きたイエス

山口雅弘 [著]



3刷!

いのちの尊厳と人権の回復

イエスが生まれ育ち、民と共に暮らし、「神の国運動」の場となった「ガリラヤ」、その地に焦点を当てて聖書を捉え直す渾身の「キリスト教解体新書」。(歴史のイエス)と(信仰のキリスト)との間にある乖離を明示してキリスト教最大の問題を乗り越え、イエスの生き方の核心を示す「いのちの尊厳と人権の回復」に肉薄する。

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

象徴と隠喩から読み解く 遠藤作品のメッセージ

〔評者〕 奥野政元



遠藤周作の生涯と文学
神学と文学の接点から見る
兼子盾夫著



兼子氏にはすでに二冊の遠藤論（『遠藤周作の世界——シンボルとメタファー』（二〇〇七年、教文館）と『遠藤周作による象徴と隠喩と否定の道——対比文学の方法』（二〇一八年、キリスト新聞社））がある。この度それらを統合集大成してまとめ、博士学位論文として新たに刊行されたのが本書である。

氏の遠藤論の特色は、遠藤の作品に見られる象徴や隠喩の意味を詳しく解きほぐして、作家固有のテーマに迫るところにある。この手法は文学研究者から評論活動を経て作家となった遠藤の特色によくかなったもので、つまり文学を対象として論理的に説明する際の手法や手続きが、自らの作品創造でも実行されているところにある。たとえば作品題名の付け方にもそれは窺えるもので、「白い人」「黄色い人」「海と毒葉」など、テーマが明確でその創作意図も

メッセージとして単純明解に伝わってくる。

しかし、ことキリスト教のメッセージの単純明解さが、人間の罪と神の赦しといった究極の場に及ぶと、神の赦しを感じ認める場合でも、また逆にそれを認めずに拒否する場合でも、共に人間の傲慢さは現れてくるものである。この点に最も重大でしかも繊細な注目を寄せ続けるのが、作家遠藤の特色でもあって、それは『沈黙』のキチジローの形象や、無力な神のリアリティを描くところによく示されている。兼子氏は、こうした遠藤の手法を「否定の道」としても捉え、神を正面からは直視することはもはやできない現代においては、作家が聖なる存在にリアリティを与えるには、ガストンやミツのように、一見愚鈍なお人好しの道化として以外には、表現し得ないと指摘する。

作品『沈黙』こそは、こうした特色が十分に發揮された

もので、また西欧キリスト教と日本人の感性という空間的
 水平軸と、ヨーロッパ中世とポスト・モダンの現代日本と
 という時間的垂直軸とが交差する十字路に、引き裂かれるよ
 うに立ち尽くす作家遠藤が、主人公ロドリゴに日本人職人
 の手になるすり減った憂い顔のキリストを見せて、そこか
 ら「踏むがいい」と沈黙を破って語りかけたキリストを描
 くことによって、「王たるキリスト」ではない「共に苦し
 む神」を創造し、そのことによって「西欧キリスト像のも
 つ距離感を克服した」(二六八頁) 作品なのだと、兼子氏
 は説得力を持って言う。また本書後半では、神学との関係
 についてカトリックの「婚姻神秘主義」にも及び、「愛の
 置き換え」の手法を『侍』や『深い河』にも見ようとして
 いるが、西欧キリスト教の根底にある異性愛と宗教的愛の

激しさの相似形に触れる感性が、日本人遠藤には共感しが
 たいものがあって、その置き換えはモーリアックや二人の
 グリーンが試みた「愛の置き換え」とは異質なものとなっ
 ていると指摘する。たとえば『侍』では「地上の王」では
 ない「王の王」に心の内で会うことができたが、それは
 「淡々と運命に従って歩んだ」結果であり、そこにかえっ
 て「しみじみとした語りくち」が産み出されたと言ひ、
 『深い河』の美津子も自分以外のだれも愛してはいなかつ
 たが、最後には「自己無化」に目覚めたと読み解くところ
 (二八二頁) など、兼子氏の深い洞察に満ちている。

(おくの・まさもと) 活水女子大学名誉教授
 (A5判・五〇二頁・定価三九六〇円・教文館)

ヨベルの本 新刊案内

エーティンガー [著] 喜多村得也 [訳]

自伝 ある神学者の事実に
 合致した思想の系譜 *七月15日刊行 二二二〇円

付録「ローマの信徒への手紙」
 はどのように構成されているか

自伝の白眉登場! モラヴィア兄弟団を
 主導したツインツェンドルフ伯爵 ユダヤ人
 カバラ学者コッペル・ヘヒト、視霊者ス
 ウエーデンボルクをはじめ、あまたの思想家
 との直截で物怖じしない交遊を通じて思索を
 重ね、次第に独自の神学へと到達し、最後は
 は無邪気な子供のようになって生涯を閉じた
 といわれるエーティンガーによる自伝。

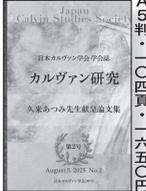


日本カルヴァン学会 学会誌 第2号

カルヴァン研究 特集
 「久米あつみ先生献呈論文集」

A5判・一〇四頁・一六五〇円

久米あつみ先生に感謝して
 カルヴァンの義認論の詳細論 吉田 隆
 礼拝の構成要素としての説教 菊地純子
 カルヴァンの聖書解釈・古代から中世を経て 野村 信
 カルヴァンの妻、イデレット・ド・ビュール 木村あすか
 晩年のリクールにおける神学的不可知論 山田智正
 H・オーバーマン著二つの宗教改革を巡って
 金子晴男/竹原創一/田上雅徳/野村 信



ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
 〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
 TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
 出版の手引き / 呈 (税込)

今日のこぼれ、 残りの人生、最初の日

〈評者〉 上林 順一郎

書名冒頭の「生涯現役が贈る」の言葉にまずショック。著者の島田恒さんは現在85歳、そしてバリバリの現役、一方、評者はひとつ歳下の現在は日本基督教団の「隠退牧師」、言葉通り「退いて隠れている」日々、この違いはどこから来るのだろうか？

島田恒さんは兵庫県生まれ、大学卒業後企業に就職、営業畑での「会社人間」の道を歩みます。しかし単なる「会社人間」でなく、生きていくことの「原理原則」を求めて大学院聴講、学会への参加、アメリカ研修旅行など多様な経験をもとに最初の著書『日本の経営の再出発』（同友館）を刊行。さらに『NPOという生き方』（PHP新書）を世に問いベストセラーに。先年出版した『教会のマネジメント〜明日をつくる知恵』（島田恒、濱野道雄共著 キリスト新聞社）は日本の教会の明日への示唆に富んだ提言で



生涯現役が贈る
人生の道標
みちしるべ

島田 恒著



す。教会にマネジメントなど不要と考えの牧師方、ぜひ一読を！

島田さんは「経営学」の研究だけでなく、実践と合わせて教育する仕事への思いが募り退社、独立。毎年、東京と大阪でセミナーを開講し「人生二毛作」を実践します。明るい人柄と豊富な話題、巧みな話しぶりで会場はいつも満席。そうした活動と経験により大学教員の道が開かれ、その分野ではまだ研究者の少なかった「非営利組織論」をテーマに経営学博士号を得る。同時に実践的な課題として「キリスト教系非営利組織」にかかわり、そのマネジメントに貢献します。

本論の第二章では社会を四つの働き「経済、政治、文化、共同」で構成されていると分析し、それぞれの特徴を明示します。特に「共同」の特徴として「共生と絆の原則（人

「もう半分」のセカイ

特集

別冊 Ministry 2025年7月号
マッチョな権力者の話は
聞き飽きた



権威ある中高年男性で
占められてきた基督教の
言論界において、
「もう半分」の人々のみで
企画、執筆する試みに挑んだ。

- 「ハタから見た基督教」対談 “ヘルジャパン” を生き抜く知恵 アルテイシア × 渡邊さゆり
- 鼎談 教会で生まれた私たちの飾らないリアル
- 対談「社会学者が基督教と恋愛について相談してみた」高橋幸 × 大倉有紀
- 対談「“推し”と“神”をめぐる信仰の諸相」柳瀬田実 × 上岡磨奈

B5判・並製72頁、定価1,650円(税込)

キリスト新聞社 since 1946

〒112-0014 東京都文京区関口1-44-4 7F
03-5579-2432 support@kirishin.com

間や社会のつながり」を強調し、「日本の経済の現場から居酒屋を覗く」(47頁以下)は意表かつ実践的提言で、「隠退」牧師のミッションとする「居酒屋伝道」とも重なり、おおいに共感！

第三章では「非営利組織」の重要性をドロッカーなどに学び、実戦的经验を経て深めてきた非営利組織の核心を「ミッション(使命)」と「人間のつながり」に求め、著者が長年関わってきたYMCA、日本キリスト教海外医療協力会、淀川キリスト教病院、中村哲医師の働きなどの事例を紹介しつつ、非営利組織のミッションの問題の核心に迫っていきます。

非営利組織はしばしば人間の「善意」によって成り立ち運営されてきたこともあり、それが時には組織や運営を不

明瞭にし、自己満足に陥りがちな傾向にあるが、著者は「非営利組織は目に見えるものを超えて価値軸(ミッション)を持つこと、また人間のつながりを大切にすることができると主張します。そのために一人ひとりが持つべき「タテ軸」と「ヨコ軸」を明示し、著者の「タテ軸」である基督教の位置づけを強調、さらに生きている限り誰もが「現役」で「余生」などないと叱咤(？)、実践を提言します。

「隠退」牧師から、いまや「隠居」牧師へと後退している日々、「今日こそは 残りの人生 最初の日」(166頁)の言葉に触発され、残り少ない人生「今日こそは、現役！」と、心に言い聞かせる毎日です。感謝！

(かんばやし・じゅんいちろう) 日本基督教団隠退教師
(四六判・一七二頁・定価一六五〇円・キリスト新聞社)

文献学や聖書学にもとづく 知見を得て実像へと導く

〈評者〉 相賀 昇



イエスとの出会いと救い
新約聖書の人びと
本多峰子著



本多峰子氏は現在、東京・八王子栄光教会における牧師であり、同時に第一線で活躍する神学者（文学・学術博士）です。評者は著者を伝道師時代から知る者のひとりですが、激務のなか数多くの優れた論文、著書、翻訳書を著わしつつ、牧会者として一筋の心もつて歩む日々。そのひたむきな研究と黙想の営みのなかから生まれたのが本書です。

前半はマグダラのマリアにはじまり、お馴染みの女性たち、すなわちサマリアの女性、ナインのやもめ、長血を患っていた女性、姦淫の現場を捕らえられた女性、聖母マリア、そしてマルタとマリアへと続きます。ちなみにレクラム版『聖書人名小辞典』（創元社）によれば、人物名の見出しは二、〇三六項目、登場人物は約三、五〇〇人にのぼります。

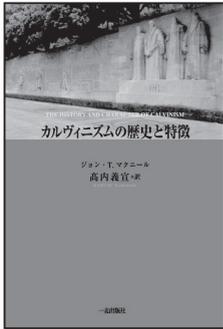
そうすると、本書に登場する人たちはなるほどイエスとの出会いを果たし救われた稀有な人たちです。しかし、著者は彼女たちや彼らたちもまたわたしたちと同じく「ごく普通の人間」であって、その救いの出来事は今も起こりうることに気づかせます。それぞれ出自もおかれた境遇もおよそ異なる人たちが、イエスが「憐れに思つて」差し出された救いの手に触れると、ひとしく癒され、慰められ、解放されて新しい人生へと送り出されていくのがわかります。読者は文献学や聖書学にもとづく知見を得て人びとの実像へと導かれます。たとえばマグダラのマリアは伝統的にふしだらな女性として歪曲されてきましたが、実は彼女こそイエスの「復活を最初に証言し、宣べ伝えた第一使徒」（本書22頁）に他ならず、虚像は見事くつがえるのです。

さらに著者が「聖母マリア」の章において次のように書



カルヴェニズムの 歴史と特徴

ジョン・T. マクニール
高内義宣訳



カルヴァンがいなければ
近代の歴史は違っていた

カルヴェニズムが辿った
歴史とその意味を
文献と資料によって
鮮やかに描き出す。

A5判・上製・函入
定価【本体 13,800 + 税】円
ISBN978-4-86325-168-7



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

くとき、その視座は現代に生きるわたしたち自身への問いかけとして圧倒的なりアリティーをもって迫ってきます。

「イエスの救いの手は、貧しい人たち、苦しめられている人たち、穢れとして避けられているひとたちに真つ先に向けられました。「……」性的虐待を受けて子を宿し、その子を懸命に育てることになるけなげな少女たちの一人がマリアだったとしたら、それこそ神のなさり方にふさわしいのではないでしょうか」（64頁）。

「神のなさり方」とは神の「意志」とも「計画」とも説かれていきます。このような「神の相」^{そま}のもとにひとが置かれると、そこでは使徒ペトロ、十二使徒たち、罪人と呼ばれている人たち、使徒ヨハネやパウロたちもみな「弱いままで招かれ」、「赦しと救いを経験した人」として真実の相

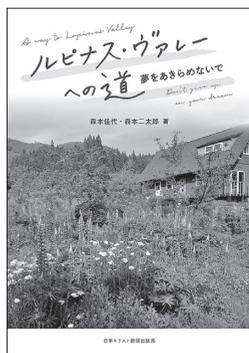
を帯びて立ち現れてきます。そしてついに圧巻の最終章、古来最大の謎に包まれた人物、罪と裏切りの悪魔とも称されたイスカリオテのユダに至っては、彼こそ「後悔と苦しみ」の末に、「……」最大の赦しと救いを経験した人」（171頁）として闇の底から鮮やかに浮上してくるのです。

イエスとは誰か、救いとは何か。この古くも新しい問いをめぐって本書は十三章全編、これまでわたしたちが抱いてきた解釈や理解の地平を修正するだけでなく、より新たな喜ばしい地平へと誘ってくれます。ぜひ多くの方にその刺激と感動を味わって頂きたいと願ってやみません。

（あいが・のぼる 日本キリスト教団 稲城教会牧師）
（新書判・一七六頁・定価一五四〇円・ヨベル）

約束の地へ着いた家族

〔評者〕 伊藤瑞男



ルピナス・ヴァレー
への道
夢をあきらめないで

森本佳代、森本二太郎著



この本を手にとってすぐ気づくのは、美しい写真がとて多いということです。写真の間に適切な文章が置かれています。写真は森本二太郎さん、文章は主著者である森本佳代さんの手によるものです。

佳代さんは、バーバラ・クーニーの絵本『ルピナスさん』（ほるぷ出版）に若いころ出会い、ルピナスの花で世の中を美しくする夢に魅せられ、2001年に実際にクーニーが住んでいた米国メイン州ダマリスコッタの町を訪れたことにより、その夢の実現の道を本気で追求し始め、ついに手にすることができた、という物語を描いています。

もちろん、岡山県北西部の新庄村しんじょうぞんにルピナス・ヴァレーの土地購入、長年にわたる庭作り、家の建築などは佳代さん一人のできるわけはなく、夫の二太郎さんと息子の潤太さんの強力な協力がありません。

二太郎さんは、1965年国際基督教大学在学中、同大
学教会が派遣した伝道キャラバンに加わってわたしと他の
二人の学生と共に愛媛県の中島なかじまという瀬戸内海の島の開拓
伝道に一カ月ほど行きました。そして中島伝道に魅せられ、
更に翌年から一年間一人で信徒伝道を試みたことが彼の進
路を決定づけたと思われる。なぜなら、二太郎さんは伝
道の傍ら子どもたちのために塾を開き、片時もカメラを手
ばなさず、中島の人々と自然を撮り続け、さらにこの間に
広島県因島いんのま出身の佳代さんに出会ったからです。

二太郎さんは佳代さんと1970年に結婚し、新潟市の
敬和学園高校で教師を15年続け、2人の間には、長女りさ
さんと次女真希さんが生まれました。しかし、このいわば
人生真つ盛りの時、二太郎さんは教師生活に終止符を打ち、
専ら自然を撮影するクリスチャン写真家に転身し、周囲の

人たを驚かせました。まず、八ヶ岳山麓の長野県八千穂村に9年間住み、北米インディアンインディアンの移動式住居であるティーピーテントを取りよせて、その中で生活し、長男の潤太さんが生まれました。その後も、妙高高原・池の平に5年間、長野県東御市とうごしに9年間、そして岡山県新庄村に移り住んで17年間、山々、森、木々、花々などの自然を撮影してきました。二太郎さんの写真に出会った人、自然について伝道的講演を聞いた人は多いと思います。

佳代さんは家族と共に、自然の近くに、また只中に住みながら、自分たちの終つひの棲家すまいかは何処になるだろうか、と考え、祈ったと思います。わたしが妻と共に2008年にルピナス・ヴァレーを訪れた時は、そこはまだ荒地でした。しかし、昨年訪れた時には、心地よい庭園となっていました。



バルトによる説教論

聖霊に導かれる説教黙想とは何か

上田光正

カール・バルトから、真に「キリストを語る」説教に必要な神学と、聖書のメッセージを正しく聴き取るための「追思考」(説教黙想)の実践を学ぶ。

A5判 並製・184頁・定価3080円



イザヤ書を読もう下

慰めよ、私の民を

大島力

イザヤ書通読の必携書、完結！イザヤ書の専門家であり、熟練の説教者である著者が第二イザヤ、第三イザヤに記された暗い時代に輝く福音を読み解く。

四六判 並製・208頁・定価2640円

た。ルピナス・ヴァレーは、佳代さんたちが自然に手を加えたものです。自然の理に適った人の自然への関与は、美しい自然を作り出しうるのではないのでしょうか。

佳代さんは、この本の中で、レイチエル・カーソンの著書『センス・オブ・ワンダー』に触れ、亡くなった彼女の別荘に泊まることができたことを喜ぶほどに、二太郎さんと共にこの海洋生物学者にして詩人の自然への畏敬のことに共感しています。同時に、ルピナス・ヴァレーの庭は神さまの「約束の地」だと告白しています。ここに、この書が持つ深みがあると思います。

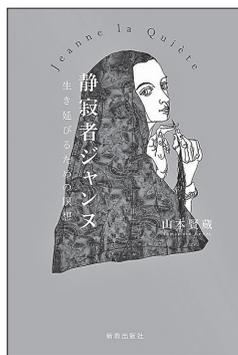
(いとう・みずお) 社会福祉法人愛清館理事長、日本基督教団隠退教師

(A5判、八〇頁、定価一七六〇円、日本キリスト教団出版局)

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp (価格10%税込)
<https://bp-uccj.jp>

ギユイヨン夫人の本格評伝に 満腔の共感

〈評者〉西平 直



静寂者ジャンヌ
生き延びるための理想
山本賢蔵著



一七世紀フランスの知らない女性、ジャンヌ・ギユイヨン夫人。なぜ私に話が回ってきたのか。読み始めて驚いた。静寂者の〈内なる道〉を井筒俊彦の哲学に沿って読み解いていた。しかも「無心」や「肚」など、日本の言葉と重ねている。嬉しくなった。「ジャンヌの〈内なる道〉は、たましいの解毒、デトックスです。どのような集団的な抑圧にも押しつぶされたくない。どのようなイデオロギーにも囚われたくない。シンプルに自由でいたい。一人一人のたましいの尊厳を守って共に今日を生き延びたい。そう思う人なら、きつとジャンヌの姿に生き延びるヒントを見出すことでしょう」(はじめに)。

ジャンヌは知的な家庭で育った。聡明な少女が一六歳で結婚させられる。夫は完全な「マザコン」。自信がなく、いつも不機嫌で、癩癩持ち。母親は底意地の悪い人だった

というから、その結婚生活は「奴隷のようだった」。

彼女は隠れ家(内なる砦)を求めた。祈ること。しかし神を実感できない。その悩みの中で「外側に求めるな」と教えられた。神を実感できないのは、神を外側に探すからだ。神を探すなら内側に求めよ。こころの中に帰れ。

この「こころ」について、山本氏は、日本語の「肚」を当てると分かりやすいと言う。「頭で神をわかってほしいはならない。分節メガネを外して、「肚」で神を直観するのだ。言葉のすっきり落ちた、すなわち言語作用がすっきり麻痺した非活性化した根源的な〈沈黙〉の内に、生身で〈ことば〉を直感する。それが〈沈黙の祈り〉だ」。

「言語」ではない。深い〈沈黙の祈り〉。肚で感じ、流れにまかせる。やわらかな神の愛に、身をゆだねてゆく。空っぽの祈り。幸せな無関心。「あらゆる区別が消え去っ

た」静寂者。

しかし夫と姑が、このジャンヌの〈沈黙の祈り〉に気づいてしまう。そして「抵抗としての沈黙」と見て妨害した。ジャンヌの人生にはこうした妨害が何度も繰り返される。〈沈黙の祈り〉は、宗教権力からも国家権力からも、危険視された。そして「スキヤンダルなデマ」が流された。ジャンヌには「スキヤンダラスな狂女」というレッテルが付きまっていた。

その彼女が本を書きベストセラーになる（『短く簡単な祈り』）。何の肩書もない在俗の女性が、祈りの指南をして、しかも人気者になる。宗教界は許さなかった。

しかし理解者も現れる。ジャンヌの人生には、その時期ごとに、有難い理解者が登場する。彼女を導き助け、あるいは、彼女を慕う人たち。なかでもフェヌロンとの往復書簡は印象的である。知的な聖職者であった彼が、知性から離れ「体験者」になる。「肚の底で」瞑想する。その過程でジャンヌに問いかけ、ジャンヌが答える。禪が、男性的な気迫と鋭さで切り開いた道を、ジャンヌたちは、やわらかく自然に、ふわりと降りてゆく。

「自分を放つたらかしくしておくこと」。もはや「わたし」ならざる「わたし」。山本氏は〈わたし〉と書く。そ

の〈わたし〉が〈沈黙のコミュニケーション〉の道具となる。しかも山本氏は（井筒哲学を土台に）その「先」も見ている。「分節世界が甦って見えてくる」。この分節世界は「神の自己顕現、自己分節としての世界」である（華嚴哲学という「事事無礙」である）。

しかし神秘家ではない。ジャンヌは「超常的な体験」には縁がない。彼女によれば「超常」を重んじるのは、むしろ、知性偏重である。傲慢な知性こそが「超常」を騒ぎ立てる。ジャンヌは「静寂者」である。空っぽである。自分は恩寵が流れるための「空の運河」であるという。

どうやらこの女性は「無知で天真爛漫」と形容される人であったようである。山本氏は「天然」とか、「ぶっただおバカぶり」が、彼女にはあったという。彼女への最大の賛辞である。幼子のように無垢でいること。

しかも「あなた」（神）の「愛」に満ちている。山本氏は書いている。「ゼロ・ポイントの無分節態に〈あなた〉を嗅ぎ取るところが、ジャンヌらしい。〈あなた〉の〈愛〉の濃密な香りが芬々として^{ふんが}いる。むせかえるようだ」。

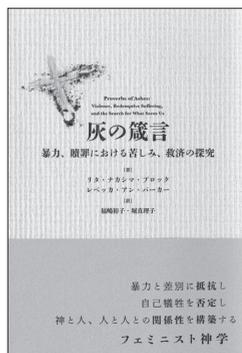
そうしたコメントまで含めて、まったく共感した。

（にしひら・ただし 京都大学名誉教授

四六判・五一二頁・定価三三〇〇円・新教出版社

暴力・苦しみ・トラウマにあつて 神学する二人の女性

〈評者〉藤本 満



灰の箴言

暴力、贖罪における苦しみ、
救済の探求

リタ・ナカシマ・ブロッック、
レベッカ・アン・パーカー 著

福嶋裕子、堀真理子 訳



書評を依頼されて初めて本書を手にした。惹き込まれるように頁を追いながら、線を引き、マーカーをつけ、さらに付箋まで貼って読み返した。書評のためではない。心が震え、一人の男性として思考が揺さぶられたからだ。男も女も同じ神のかたちに創造されているにもかかわらず、人生のあり方が異なる。女性が味わう屈辱は、その尊厳をひどく傷つける。本書は多くの女性の叫びを代表し、癒しを与える。

二人の女性が、自らの子ども時代に経験した虐待や差別の苦い経験を、その後封印した記憶の底から掘り起こし、包み隠さず語り合う。苦しみや屈辱は、過去の出来事として終わったのではなく、無意識のうちに人生を呪縛し続けてきた。何があったのか／なぜ／どのように縛られてきたのか——。当時の辛酸に満ちた出来事と、それが今に至るま

で引きずってきた心情が赤裸々に記されている。

牧師・神学者となった二人は、この呪縛を神学的に考察する。十字架という犠牲を尊ぶキリスト教が、時に暴力と共犯関係にあつたことを指摘し（19頁）、そこから解放たれていく。

神学をするとは、このようなことではなからうか。神学と呼ばれる体系的な知と論理を理解することに多大な時間を費やしても、その労苦が必ずしも、生々しい傷を負った人々を助けることにつながるわけではない。二人は女性として生き、女性に自己犠牲を強いる社会に抗うことで「フェミニスト」であり、男権主義的キリスト教に抗うことで「フェミニスト神学者」である（63〜64頁）。

彼女たちは、自らの問題を単に伝記的に省察しているのではない。「罪人を赦すだけでなく、罪の犠牲となり痛手

を負った者を癒す神学」(17頁)を求めている。

すなわち人種差別・性差別・同性愛嫌悪・性的虐待・家庭内暴力——そうしたトラウマの中に生きる人々、暴力的に愛を破壊された人々、その時以来「十全に存在し生きること」(267頁)を妨げられてきた人々すべてに、「いのちに仕える」(77頁)神学を提供しようとしている。

「灰の箴言」というタイトルは、ヨブ記13章12節に由来する。暴力的犯罪・自然災害・病によって家族も自分も犠牲になったヨブに対して、友人たちは、まるでヨブに原因があるかのように責め立てた。

彼らの理屈や原理は、慰めにも励ましにもならなかった。同じ意味で、暴力の犠牲者となった者に対して、十字架の受難と自己犠牲を強いるような神学は、「灰の箴言」となる。

本書は挑戦的でありながらも、乱暴ではない。男権社会の中でサバイブした二人が、柔軟な信仰、包容力ある愛、人の尊厳を蹂躪する伝統を打ち破る勇氣をもって、率直な問いを受難の神学に対してぶつけていく。

ヨブは苦難と犠牲に抗い、神に訴えた。その中で、ヨブが「岩間の野やぎが子を産むのを見守っている」神の臨在に触れたように、二人は「自分を照らす光を垣間見るエビ

ファンニー」(26、416頁)を経験する。聖霊は、教会にも、地域社会のワークショップにも働いていた。「人間の聖性に尊敬の念を抱き、そのような聖性を世界の中で具現化する人々」が、互いに「強いつながりを築くために、自分という存在を互いに向かって差し出す」(186頁)場に、神は現れる。そのとき、幼児期に性的暴力の犠牲者となった著者の「深いところで何年も続いていたうなり声が静まり、古傷が石のように落ち始めた」(358頁)。性的暴力を振るった男は、人生の偶像となってきたという。だが、神が現れたとき、レベッカは加害者から解放された。こうして父権主義的神を脱構築するとともに、加害者という偶像を脱構築することができた(326頁)。第5章に展開される「顕現」の物語は、圧巻である。

訳者二人は、青山学院大学ジェンダー研究センターで活動してきた。同センターが本書の出版を支援したことは尊い。秀逸な翻訳。流れるように大著を読み進めることができる。福嶋裕子氏による「訳者あとがき」は、本書を読むキリスト者には必読である。松籟社(しょうらいしゃ)の本作りのセンスにも感動を覚える。

(ふじもと・みつる)インマヌエル高津教会牧師

(四六判・四五二頁・定価四六二〇円・松籟社)

各ページに繰り返されているのです。40年に、単なる時の長さではなく、厚みと深みを感じさせます。

住谷先生がこれまでお出しになった書物には、ダンテの『神曲』を扱ったものもあれば、歌集もありですが、たぶん牧師たちの書齋にあるのは『烈しく攻める者がこれを奪う』という二冊の論文集です。聖書の難所、あるいは気にも留めなかったような箇所を深掘りしているのが、説教準備に刺激をくれる面白い論文ばかりなのですが、その文章も装丁も書棚の群を抜いて美しい。いわゆる神学書っぽくありません。その鋭い知見が、この講話集にわかりやすく披露されていて、私たちの読み方を感度のよいものにさせてくれています。

透明感のある文章が心地よく、清潔です。中には性的テーマもためらわず取りあげられていて、それがまた知るべきことへと向かって行きます。チツポラとモーセのやりとりのところのように、説教壇から語られたら皆どんな顔をして聞くのかと思うような箇所も、私みたいに照れて口ごもると聴く方もかえって困るだろうものを、この人が説くと全然いやらしくないのです。

「ガザ」は必読です。「命の木」もイメージを思い浮かべながら丁寧に読みたいところです。私がとくに多くを示さ

れたのは第二コリントについてのいくつかの講話でした。そしていちばん気に入ったのが、エリシャについての講話「言葉の暴力について」。そこには、こんな歌も出てきます。

われを見て えろはげじじいと囃したる 子らを前にし
エリシャになれず

なお、本書の風変わりなタイトルは、次の歌から採られています。

神さまの エンドロールのかたずみに あつたらいいな
わがクレジツト

こちらから開いている窓は、向こうからこちらに開かれた窓でもあります。すべてを神さまはご覧になって、すべてを知ってくださいます。

(ささき・じゅん＝武蔵野教会牧師)

(A5判・七一〇頁・定価七四八〇円・一麦出版社)

既刊案内 (2025年4月～2025年5月)

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
ルター研究所編	ルター研究 第19巻(2025) ——徳善義和先生・鈴木浩先生 業績一覧掲載	A5	256	2,200	ヨベル	3/31
本多峰子	イエスとの出会いと救い ——新約聖書の人びと	新書	176	1,540	ヨベル	4/29
日本キリスト教団出版局編	涙の夜 喜びの朝 ——受難・復活・聖霊降臨	四六	112	1,540	日本キリスト教団出版局	4/4
森本佳代、森本二郎著	ルピナス・ヴァレーへの道 ——夢をあきらめないで	A5	80	1,760	日本キリスト教団出版局	4/17
村上純子	子どもと育ちあうために ——「どうしよう?」と悩む ときのヒント	四六	136	1,650	日本キリスト教団出版局	4/25
松本雅弘	自分自身と群全体とに気を配りながら ——メッセージ集	A5	310	2,200	新教出版社	4/11
松本敏之	神と民の契約 ——出エジプト記19～40章・ 十戒による説教	四六	328	2,200	キリスト新聞社	4/22
仲野好重	君は捨てたものじゃない!	四六	278	1,760	キリスト新聞社	4/26
及川信	人間とは何であるか ——ヨブ記講解説教	四六	288	2,640	一麦出版社	4/22
トーマス・F・トールانس編 原田浩司訳	主の晩餐の奥義 ——ロバート・ブルースの説教	A5	250	2,420	一麦出版社	4/27
近藤勝彦	日本キリスト教神学小史 ——教義学の視点から	四六	218	2,420	教文館	4/23
桜井健吾	近代世界と宗教 ——19世紀ドイツのカトリッ ク社会・政治運動	A5	436	5,940	教文館	4/23
岡山孝太郎著 [バラバは、死なず!]刊行会編	バラバは、死なず! ——マルコ福音書が拓く社会 福祉の未来像	四六	132	1,650	キリスト新聞社	5/17
渡辺正男	老いをどう生きるか	四六	176	2,200	日本キリスト教団出版局	5/19
小林よう子編	教会は初めてのあなたへ ——32人の牧師からの手紙	四六	112	1,430	日本キリスト教団出版局	5/23
大野顯二	あかりを灯しつづけて37年	四六	200	1,430	新教出版社	5/23
正田倫顯	ゴッホの宇宙	A5	232頁 +口絵 48頁	3,080	教文館	5/23

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zeninkan_systen_0530@yahoo.co.jp	02350-0-874
エッセイの木	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6 エマオ1F	022-223-2736	022-302-6678	https://essainoki.jp/	shop@essainoki.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新館3-2 千葉クリスタルセンタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待星堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimbo.com/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス東京	169-0051	新都区早稲田3-18(A/C0ビル2F 通称専門)	03-3203-4137	03-3203-4186	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	112-0014	文京区口1-44(原宿ロビビル日本橋内(外販専門))	03-3260-5663	03-3260-5637	tokyo@nikkhan.co.jp		00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.tuighte.net.jp/~yokohama-us/index.html	sksch@mvva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	466-0045	名古屋市中区大須町16 日教キリスト教団 教務会内	052-680-8090	052-680-8091	http://nagoya-seibunsha.la.cococan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
バイブルハウス京都	606-0007	京都市左京区岩倉東五丁目23 日本基督教団平安教会内	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kiJordan/	kiJordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
バイブルハウス堺	591-8023	堺市北区中百舌島町2-87 チャペルこつり2F	072-255-4970				
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osekacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店(聖燈社)	591-8044	大阪府堺市北区中長尾町2丁1-18	072-254-2233	共用		sekaixx@outlook.jp	00970-0-172228
神戸キリスト教書店	650-0025	神戸市中央区船生町4-5-2 神戸駅前ビル401	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkhan.co.jp	00170-2-421390
広聖聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道/西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwbtf3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/matsuyama_1007/mbs.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販売部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2025年8月号

特集1 平和を作り出す人たち

寄稿者 大澤香、星出卓也、飯田瑞穂

特集2 II グスタボ・グティエレス追悼

寄稿者 青野和彦、小林雅博、ハイメ・ラミレス

◆短期連載 わたしたちキリスト者は天皇制をどう考えるべきか (石田学) ◆連載 ほやき牧師のさすらい説教録 (富田正樹) ◆異端者の世界航海 (福嶋揚) / 証言としての旧約聖書 (田島卓)

／新約釈義 ルカ福音書 (山崎ランサム和彦、他)

A5判・定価660円・〒70円
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148
Email: sales@shinkyo-pb.com

編集室から

毎号巻頭にて一つのテーマに基づ

き識者に三冊の書籍を紹介いた

だ「特集・シリーズこの三冊!」で

あるが、今号は「コンクラーヴェ

をテーマとさせていただいた。記事

でも触れられた、今春話題となった

映画『教皇選挙』に加えて、前教皇フランシスコの逝去か

ら新たにレオ14世を選出したコンクラーヴェが世間で大い

に注目されていたため、テーマとして取り上げるなら今し

かない、と思った次第である。

執筆依頼を快くお引き受けいただいた阿部仲麻呂神父に

は感謝の言葉しかない。テーマのコンクラーヴェだけに留

まらず、教皇制度とその歴史にまで踏み込んで詳しく説明

くださり、大変読み応えのある記事になったと思う。是非

予告

本のひろば

2025年9月号

本・批評と紹介

(書評) 岡山孝太郎著『パラバは、死なず!』、渡辺正男著『老いをどう生きるか』、小林よう子編『教会は初めてのあなたへ』、トーマス・F・トールانس編『主の晩餐の奥義』、及川信著『人間とは何であるか』他

ご一読いただきたい。

カトリック教会でならともかく、普段の日本社会では教

皇が話題になることがそもそも少ない。ましてその代替わ

りにだけ行われるコンクラーヴェについて知る機会はある

りないのではないか。本記事と紹介いただいた三冊が皆様

の学びの一助となれば幸いです。

(村上)

※訂正とお詫び

前号7月号表紙にて、巻頭エッセイ「出会い・本・人」

のタイトルを間違って表記していました。正しくは、「こ

ぼれ落ちる時間の向かう先——トマス・アクィナスとの出

会いから」です。訂正してお詫びいたします。

イエスへの祈り

主教カリストス・ウエア著／柳田洋夫訳

「主イエス・キリスト、

神の子よ、私を憐れんでください」この短い祈りは東方教会で長く親しまれてきた射祷である。本書は、この祈りの歴史、その豊かな神学的意味、祈りの実践方法を正教会の第一人者が懇切に解説し、私たちを祈りの生活へと促す。 B6変・定価1870円

6月23日



私が出会った人々 神の庭にて

大野恵正著 (おおの・よしまさ氏は活水女子大学名誉教授)

私という人間は、神の計らいにより、人生の道々で有名無名多くの人々と出会えたことによつて形づくられてきたのだ――。その恵みを感じ、懐かしい師、信仰の友、そして愛妻との出会いを滋味豊かに綴る珠玉の信仰随想集。 四六判・定価1980円

6月23日



あかりを灯しつづけて37年

大野顯二著 (おおの・けんじ氏は成松教会の元牧師)

兵庫の小さな町に教会がある。歴史があり、差別もある。牧師はそこで説教し、町の人々と共に生きてきた。時にはうつを患いながら……。説教と自伝的講演を収録。 四六判・定価1430円

5月23日



自分自身と群全体とに気を配りながら

松本雅弘著 (まつもと・まさひろ氏は高座教会の元牧師)

主から託された教会に37年間仕えた牧師の思いがほとぼる説教と論考。併せて3本のインタビューを収録し、説教の方法、牧会との関係、神学との切り結びなどについて牧師の率直な声を引き出す。 A5判・定価2200円

4月11日



A5判・定価2200円

静寂者ジャンヌ

生き延びるための瞑想

山本賢蔵著

注目!

柳田邦男氏推薦 「異端の女性神秘家」として闇に葬り去られたギユイヨン夫人の本邦初の本格評伝。女性差別社会に抗して戦い抜いたための「静寂の道」を独自の視点から解明した労作。 四六判・定価3300円

倫理

DBW 版新訳

大反響

ディートリヒ・ボンヘッファー著／宮田光雄監訳

ボンヘッファーがライフワークとして取り組み、ナチによる逮捕と刑死によってついに未完に終わった倫理学。新版全集第6巻(DBW6)は奇跡的に亡失を免れた草稿を徹底的に校訂し膨大な脚注を付して成立順に再構成。待望の完訳。 四六判・定価6930円



本
S
I
S
T
E
R
S
1
9
5
7
年
七
月
一
七
日
第
三
種
郵
便
物
認
可
二
〇
二
五
年
八
月
一
日
発
行
(毎
月
一
回
一
日
発
行)
第
八
二
号 二〇二五年八月号



信仰生活ガイド 第3期 第1回 配本 2025年7月25日刊行予定
教会、その破れと再生 越川弘英 編
 『信徒の友』記事を再編集、信仰生活の基本を確認するシリーズ第3期、刊行開始！信徒同士が裁き合うといった「破れ」を経験した教会は、どのような道筋で再生するのか。
 ◆四六判 並製・128頁・定価1,540円

シリーズ好評発売中 『主の祈り』『十戒』『使徒信条』『信じる生き方』『教会をつくる』各巻 定価1,430円
 『祈りのレッスン』『老いと信仰』『苦しみの意味』各巻 定価1,540円

発行所 〒112-0014 東京都文京区関口一丁目四四-14 一般財団法人キリスト教文書センター
 電話03-3311-6510 振替0017-016510
 発行人 金子和人 編集人 村上信児 印刷所 モリモト印刷
 日本キリスト教出版株式会社 電話03-3311-6570

信仰の旅路

伝道メッセージ集

小島誠志 2025年7月24日刊行予定
 四国の地で58年伝道に尽力し、反撥されても風雨について前進する小舟のように、ひたむきに聖書を語り続けてきた著者の珠玉のメッセージ22編を収録。
 ◆四六判 並製・200頁・定価2,640円



イベントのご案内

酒井陽介 講演会

「ヘンリ・ナウエン 傷ついても愛を信じた人」



20世紀を代表する霊的指導者ヘンリ・ナウエンの生涯と信仰について、ナウエン研究の第一人者で、NHKラジオ番組「宗教の時間」出演中の酒井陽介氏（カトリック司祭、上智大学神学部・上智大学大学院実践宗教学研究科准教授）が語る。

- 日時 2025年8月30日(土) 14時～16時《開場：13時30分》
- 会場 教文館3階 ギャラリー・ステラ
- 参加費 500円
- 申込方法 Peatixよりお申込みください



●お問い合わせ
 教文館キリスト教書部 TEL 03-3561-8448
 メール xbooks@kyobunkwan.co.jp
 【主催】 教文館キリスト教書部 日本キリスト教団出版局 共催

本のひろば.com



定価七八円(税抜七一円) (¥63円) 一年分1100円(送料共)